

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00915

研究課題名（和文）英語学習者による動詞項構造の誤りに対する気づきを促す指導法の開発

研究課題名（英文）Development of instructional methods to encourage English language learners to recognize errors in verb argument structure

研究代表者

近藤 隆子（KONDO, Takako）

法政大学・文学部・講師

研究者番号：60448701

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本語を母語とする英語学習者による動詞の項構造の誤りに対する気づきを促す指導法がどれほど有効であるかを、発話データを収集し実証的に調査した。実験の結果、自動詞と他動詞の項構造の誤りに関しては、ほとんどの場合、学習者は自分で誤りに気づくことが可能で、一度気づき、適切な言語形式を理解した動詞に関しては、その後も発話時に項構造を意識することで適切に使用できることがわかった。さらに、動詞の項構造に関する誤りの一つである自動詞への受動態の過剰使用が、より具体的にどのような動詞で起こるのが、また、主語の有生性の影響がどの程度あるのかを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語を母語とする英語学習者（JLEs）の英語能力をより効果的に伸ばすには、学習者に「自身の誤りに気づかせることが有効である」という仮説の下、その仮説が実際にどれほど有効であるかを、発話データを収集し実証的に調査した第二言語の習得研究である。本研究の特色は、JLEsの実際の発話をデータとし、それを本人に分析させることで、誤りへの気づきを促す点にある。このような視点から学習者の発話データを分析し、学習者が気づきやすい文法項目とそうでない項目とに分類し、その成果を英語教育に応用した研究報告はこれまでになく、その意味でも本研究の意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：The effectiveness of instructional methods aimed at promoting awareness of errors in verb argument structure among Japanese learners of English was empirically investigated through the collection of speech data. The results of the experiment revealed that, in the case of errors related to intransitive and transitive verb argument structure, learners were able to recognize their own errors in most cases. Once they became aware and understood the appropriate forms of the verbs, they were able to use the verbs with the correct argument structure in subsequent speech. Furthermore, the study shed light on the specific intransitive verbs that Japanese learners of English tend to overgeneralize the passive voice with, as well as the extent to which the animacy of the subject influences this phenomenon.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：第二言語習得 英語教育 明示的文法指導 学習者の気づき アクティブラーニング 動詞の項構造 主語名詞句の有生性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究において、これまでに英語の動詞の誤りに関する研究が数多く行われてきた。動詞を適切に使うということは、動詞の持つ意味と項構造(つまり、その動詞が文法的に適切に使用されるために必要となる主語、目的語、補語などの統語構造)を理解することがまず必要である。そして、主語との関係で能動態や受動態にしたり、時制などに合わせて動詞の形を変化させたりする必要がある。言語を産出する場合、これらのプロセスが上手くいかなければ、自動詞に過剰に受動態構造を当てはめしまったり(例:\*An accident was happened.)、自動詞(「主語+動詞」構造を取る動詞(例: disappear, fall, happen))と他動詞(「主語+動詞+目的語」構造を取る動詞(例: accept, hire, publish))の項構造を混同したり(例:\*The magician disappeared the rabbit.)、他動詞が必要とする目的語の項を欠如させたりする(例:\*He published.)。

動詞の習得に関する先行研究の多くは、学習者が英文の文法性を適切に判断できるかどうか(文法性判断テスト)を調べたり、英語でエッセイ・ライティングをさせ、その結果を分析したりするのが一般的である(紙と鉛筆によるテストを「紙面データ」と呼ぶ)。しかし、発話データを分析対象とした研究はほとんどない。発話データと紙面データを比較した場合、発話データの方が紙面データよりも誤りが多い。これは、発話は瞬時に行われるため、頭で考える時間が紙面テストの時よりも短くなるからである。発話データは、学習者のもつ本来の言語能力をより反映していると言える。

日本で長年課題となっている日本語を母語とする英語学習者(Japanese learners of English, JLEs)のスピーキング能力向上の問題を克服することは、国際化する社会において最重要である。英語スピーキング能力には、流暢さだけでなく、正確さも必要となる。正確さには、適切な語彙の選択、適切な文法、そして、容認されるべき発音が含まれる。しかし、日本の教室における英語教育では、学習者が自らの発話を自身で聞き、モニターする機会がほとんどないため、自分が文法的な誤りをしていることに気づいていない可能性が高い。

そこで、本研究では、大学生に自身の英語発話を録音してもらい、その発話データを自身で書き起こし、分析する作業を通じて、自分で誤りに気づくよう促す指導法を採用した。JLEsの英語動詞構造の誤りとその指導法を研究しようと考えた理由は、動詞を中心とする項構造が言語(習得)の核だからである。動詞の項構造の習得を調査することで、第二言語習得の全体像を見ることができると考えている。加えて、第二言語習得の先行研究では動詞に関する誤りが数多く報告されているためである(つまり、それほど習得において重要な文法領域だということである)。動詞の適切な構造に気づく(理解する)ことは、英語の習得において非常に大切なことである。しかし、主要な先行研究において、第二言語学習者の動詞の習得に関し、気づきを促すために発話データを用いたものはないため、本研究では、そのようなアプローチを採用して研究に取り組もうと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、英語学習者が動詞の誤りに自分自身で気づくことが習得においていかに有効であるかという問題を収集する音声データを使って実証的に検証し、その結果を教育実践に応用することにある。気づきを促す指導法の有効性の範囲とその限界を、主としてJLEsの動詞

の項構造の習得を中心に分析しようと考えている。そして、次の2点において、研究成果を教室での英語教育に役立たせることができると考えている。

(1) JLEs の発話データを彼ら自身に分析させることで、自ら誤りに気づくよう促し、習得につなげる

(2) 学習者が容易に気づかない誤りに対して、どのような明示的指導が効果的であるかを研究する

JLEs が能動的に学ぶアクティブ・ラーニングを実践し、彼らが何に気づき、何に気づけないのかを把握し、気づけない文法項目については効果的な明示的指導法を開発、提案したいと考えている。

### 3 . 研究の方法

本研究では、それぞれの動詞の持つ項構造の習得に学習者の「気づき」がどのように効果があるかを考察する。具体的には、先行研究で誤りが頻繁に指摘されている以下の動詞の項構造に焦点を当て、「気づき」によって学習者が適切に当該構造を使用できるようになるか調査する。

自動詞：arrive, disappear, fall, happen など（例文：My wallet has disappeared.）

他動詞：accept, hire, publish, reject など（例文：Nancy accepted the proposal.）

自他交替動詞：break, close, melt, open など（例文：The vase broke./ I broke the vase.）

調査方法は、前述したように学習者の発話データを使用し、以下の手順で行う。

1. 実験参加者である JLEs が日本語で書かれた設定文を読み、与えられた動詞を適切な形にして英文を発話し、それを自分で録音し、その発話データを書き起こし、分析する。

問題例：

(3) 「昨夜、車の事故（many car accidents）が多発した（happen を使って）」

模範解答： Many car accidents happened last night.

JLEs の誤りの可能性： Many car accidents were happened last night.

2. 1 の書き起こしデータを、実験者が検証し、JLEs のおかす誤りの中で、自分で気づきやすい項目と気づきにくい項目が何であるか、明らかにする。

3. 気づきにくい誤りに対しては、明示的な指導をし、指導の効果がある項目とない項目が何であるかを明らかにする（再テストをする）。

4. 一度気づいて直った項目が、一定期間持続可能かどうか再度、調査する。

### 4 . 研究成果

まず、過去に明示的文法指導の効果を検証した自動詞と他動詞を再度調査項目として、今までの紙面テストをもとに、これらの動詞の項構造の習得における JLEs の誤りに関する先行研究の結果分析と誤りの傾向調査を行った。その結果、下記の動詞で JLEs が項構造に関する誤りをする傾向にあることがわかった。

(4) 自動詞: *appear, arrive, rise, exist, remain, fall, depart, emerge, die, belong*

(5) 他動詞: *hire, accept, invite, damage, destroy, publish, reject, build, promote, read*

さらに、自動詞に関しては、主語名詞句の有生性がJLEsの文産出に影響を与える可能性があることがわかった。すなわち、文の主語名詞句が有生物名詞句のときよりも無生物名詞句のときのほうが、JLEsが自動詞に受動態を過剰般化する傾向があるのである。

これらの結果をもとに、発話実験の内容と手順を決定した。実験では、大学生に、与えられた動詞を適切な形にして英文を瞬時に作成・発話してもらい、それを学生自身のスマートフォンに録音し、その発話データを書き起こし、誤りの分析をしてもらった。その結果、発話データには非常に多くの項構造に関する誤りが含まれていたが、学生個人の分析作業を通じて、ほとんどの誤りに気づくことができた。学生個人またはクラスメートとの協同学習を通して気づかない誤りに関しては、実験者が授業内で簡単な説明をした。その後、同じテストを2回実施し、一度気づいた誤りが一定期間持続可能かどうか調査した。最後に、学習者に、本実験を通して何に気づき、また、なぜ誤りをしなくなったかについて自分自身で分析してもらった。

その結果、自動詞と他動詞の項構造の誤りに関しては、ほとんどの場合、学習者は自分で誤りに気づくことが可能で、一度気づき、適切な言語形式を理解した動詞に関しては、その後も発話時に項構造を意識することで適切に使用できることがわかった。数は少ないが、学習者自身では気づかない誤り(項構造を完全に誤って理解している動詞)については、簡単な指導をする必要があることもわかった。大学生JLEsは、中学・高校の英語教育で習ってきた言語知識を頼り、自らの発話を客観的に分析することで、無意識におかしている誤りに気づき、適切な言語形式を理解し直し、次にその形式を意識しながら再度使用してみることで、当該言語形式が中間言語に取り入れられ、コミュニケーション場面においても自動的に使えるようになり、最終的には習得につながると考える。

本研究では、JLEsは自分の発話を文字化することによって、自らがおかした多種多様な誤りに気づくことができた。さらに、彼らはこの言語活動自体にとっても興味を持った(つまり、知的関心を高く持って学習できる活動であった)。動詞の適切な構造に気づく(理解する)ことは、英語の習得において非常に大切なことである。しかし、繰り返しになるが、主要な先行研究において、第二言語学習者の動詞の習得に関し、気づきを促すために発話データを用いたものはないため、本研究では、そのようなアプローチを採用して研究に取り組んだ。データ収集には、大学生のスマートフォンの録音アプリを使用したため(学生のスマートフォンの使用率は100%であった)、このやり方は大学生が今後自己学習で採用することも可能であり、学習方法の幅を広げることができると言える。

次に、前述の実験から明らかになった問題点・疑問点について明らかにするために自動詞と他動詞の習得に関する追実験を行った。自動詞を動詞の持つ完結性により3つのグループに分け、文の主語名詞句の有生性が受動態過剰般化に与える影響について調査した。これまでの研究からの修正点として、有生物名詞句には、「人間」のみを使用し、無生物名詞句には、「自分の力で動くことがない『もの』」のみを使用した。本実験結果から、JLEsの自動詞の受動態過剰使用が、より具体的にどのような動詞で起こるのか、また、主語の有生性の影響がどの程度あるのかを明らかにすることができ、これらの誤りの効果的な指導法の開発に有益な情報が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kondo, T., Shirahata, S., Suda, K., Ogawa, M. and Hideki, Y.	4. 巻 31
2. 論文標題 Effects of Explicit Instruction on Intransitive and Transitive Verbs in Second Language English: with a Special Focus on Non-Instructed Verbs.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. and Yokota, H.
2. 発表標題 The influence of animacy of sentential subjects on overpassivization in L2 English
3. 学会等名 The 20th International Conference of the Japan Second Language Association
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. and Yokota, H.
2. 発表標題 The influence of animacy of sentential subjects on overpassivization in L2 English
3. 学会等名 The 20th International Conference of the Japan Second Language Association
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. and Yokota, H.
2. 発表標題 Effects of explicit instruction on intransitive and transitive verbs in L2 English
3. 学会等名 Japan Society of English Language Education 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 近藤隆子・白畑知彦
2. 発表標題 第二言語習得データを用いた学習分析・学習者分析を英語教育に活かす（自動詞・他動詞の習得）
3. 学会等名 外国語教育メディア学会第94回中部支部研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 ことばの習得から英語教育を考える
3. 学会等名 東北学院大学英語英文学研究所学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 近藤隆子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 246
3. 書名 「第二言語学習者による自動詞の習得－統語構造と動詞の完結性の観点からの検証－」『第二言語習得研究モノグラフシリーズ3』	

1. 著者名 白畑知彦、近藤隆子、小川睦美、須田孝司、横田秀樹、大瀧綾乃	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 220
3. 書名 「日本語母語話者による英語非対格動詞の過剰受動化現象に関する考察－主語名詞句の有生性と動詞の完結性の観点から－」『第二言語習得研究モノグラフシリーズ4』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	白畑 知彦  (Shirahata Tomohiko)  (50206299)	静岡大学・教育学部・教授     (13801)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関